

WCRP

World Conference of Religions for Peace Japan

9
2024
September
No. 539



「平和のための AI 倫理」国際会合報告のため岸田首相を訪問（首相官邸）

こころの扉 — 「平和の荷車」 杉谷義純	2
岸田首相に「平和のためのAI倫理」国際会合の実施を報告	3
広島・長崎平和関連行事への参加	4
能登半島地震支援について	5
平和研究所 第3・4回研究会	6
いのちの森づくりプロジェクト「鎮守の社安全祈願祭」	7
共催講座「核時代における非戦」第1回開催	7
新役員紹介	8
今月のWCRP新熟語、WCRPの活動	8



「平和の荷車」

WCRP日本委員
会長跡主
会天台宗妙法院門
会天門

杉谷義純



この度、世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会の庭野日鑑前会長のご退位に伴い、会長職の重責を担うことになりました。もとより浅学非才ではありますが、日本委員会発展のため全力を傾注してまいりますので、御関係の先生方の倍旧の御協力をお願い申し上げます。

そして、1970年の創設以来、WCRPが大切にしてきた諸宗教間の相互理解から生み出される叡智を結集し、寛容な精神に基づく積極的な対話の実践を、諸先輩や多くのお仲間が真摯かつ堅実に進めてこられたことに深く敬意を表するものであります。さらに、この度の会長職の拝命にあたり、これまでの先達

のご努力をしっかりと継承し、そして後世にこの歩みを着実に繋ぐ役割を果たすべく決意を新たにしたいと存じます。さて、今日のWCRP日本委員会の諸活動は、各タスクフォースや常設部会による具体的なプロジェクト、国際委員会やACRPと連携した国際活動など多岐にわたっておりますが、申すまでもなくその基盤になつていられるものは対話の実践であります。その中で、特に本年、WCRP日本委員会は2つの国際会議を開催した「戦争を越え、和解へ」諸宗教平和円卓会議の第2回東京平和円卓会議です。ウクライナ、ロシア、イスラエル、パ

レスチナなどの宗教指導者が東京に集い、現在、勃発している紛争の解決や和解に向けた話し合いを行いました。世界の厳しい戦争に目を背けることなく、宗教者が解決の糸口を求めた行動こそが、WCRPが目指してきた実践であり、不可能と思われることにも光明を見出す勇気が必要だと思えます。もう一つは7月に広島で行われた国際会合「平和のためのAI倫理・ローマからの呼びかけ」にコミットする世界の宗教」です。人工知能（AI）という新たな科学技術は計り知れない利便性と効率性によって人間生活に大きな恩恵を与える一方で、人間性を失いかねない負の影響があることも見逃してはなりません。こうした新たな課題にも対話の対象の範囲を広げ、WCRPは時代に即した対応が求められているのです。

現在、世界各地では暴力と紛争、分断、格差などによって平和が脅かされ、多くの人々が犠牲になり、深刻な状況での生活を余儀なくされている人々が増大しています。また核兵器の脅威はかつてないほど高まっており、気候危機は後戻りできない状況になりつつあると言われ、人類の未来に暗い影を落としております。

こうした状況であるからこそ、宗教者は、宗教者同士そして様々な立場の人々と幅広く対話し、信頼の醸成を促すことが必要です。対話を通して培った信頼こそが問題解決の糸口を示し、それが平和への入口となると信じます。その対話にあたっては、次の三要素を忘れてはなりません。

- (1) お互いに対等であること
 - (2) 相手に敬意を持つこと
 - (3) 相手に無知であってはならないこと
- 私たちの平和への営みは、坂道を荷車を押しながら一歩一歩進んでいる姿に似ています。人々の気持ちがあつたり、気を抜けば、荷車は下ってしまいます。WCRPに集う皆で力を合わせて平和の荷車を少しでも押し上げていこうではありませんか。

岸田首相に「平和のためのAI倫理」国際会合の実施を報告

8月21日、WCRP日本委員会の杉谷義純会長、戸松義晴理事長、庭野光祥理事らは首相官邸を訪れ、岸田文雄首相と面会し、7月に広島で開催した国際会合「平和のためのAI倫理・ローマからの呼びかけ」にコミットする世界の宗教」について報告した。この会合は7月9、10日、広島市の平和記念公園内の会場で、WCRP日本委員会と教皇庁生命アカデミー、アラブ首長国連邦のアブダビ平和フォーラム、イスラエル諸宗教関係首席ラビ委員会の4団体が共催し、13カ国からキリスト教、ユダヤ教、イスラーム、仏教などの宗教指導者をはじめ、学者、研究者、大手ハイテク企業関係者ら150人が参加した。この会合に岸田首相からビデオメッセージが寄せられたほか、河野太郎デジタル大臣や牧島かれん前デジタル大臣が参加し、挨拶を述べた。



8月21日、岸田首相との会談は、冒頭、杉谷会長から岸田首相のビデオメッセージや河野大臣

の参加など、政府として会合に関心を寄せて頂いたことに謝意を表した。その上で、同会合が盛会に終えられたことを報告。会合に対するメディアからの注目度が高かったことについて、AIという問題に向けられた社会的な関心の高さと共に、広島という地で開催した意義がよく理解されたのではないかと認識を表明した。また、世界的な大手ハイテク企業のマイクロソフトやIBM、Ciscoの首脳陣が会合に参加した一方で、国内の企業の参加がなかったことについて、「日本でもこうした動きを広めていかなければならない」との決意を語った。

岸田首相からは、今年イタリアで行われたG7プーリア・サミットで、ローマ教皇フランシスコの講演に感銘を受けたと話し、「AIの可能性とリスク、さらには人間の本质に関わる深い部分に影響を与えるものであるということを認識し、その重さを感じた」「だからこそ、皆さまにもいろいろと考えていただき、ご指導いただくことは大切だと思う」と述べた。さらに、昨年のG7広島サミットでAIに関する国際的なルール作りをリードするべく立ち上げた「広島AIプロセス」の賛同国が50カ国を超えたことを紹介し、広島という地はこれまで、核軍縮など「平和」が主なテーマであったが、それに加えてAIの世界でも重要な地になっていると強調した。その上で、同会合が広島で行われた意義について理解を示し、「AIの議論はまだ始まったばかり



岸田首相に説明を行う杉谷会長

り。進化も著しく、どれほど私達の社会に影響を与えるか、わからない部分も多い。ぜひ宗教者の皆さまにも、引き続き今回のような努力を続けていただきた「と期待を

述べた。それらを受けて、戸松義晴理事長は、会合の中でマイクロソフトのブラッド・スミス社長との出会いを振り返り、同氏から「企業としては、技術の開発を進めていくが、その使われ方に関しては、社会全体で考えてほしい。ぜひ宗教者にも一緒に考えていただき、声を上げてほしい」と言われたことについて紹介した。AIの問題について「日常生活の中でも檀信徒や門徒、会員の皆さまと話をし、その重要性について理解を広めていきたい」と決意を述べた。また、庭野光祥理事は、人間は「六根（眼、耳、鼻、舌、身、意）を具えた存在である」との認識を示した上で、「それを持たない存在としてのAIが、身体を持った人間とどのように関わっていくのが大事なテーマ」と強調した。今後、日本社会や宗教界において、AIに対する認識や議論が深まっていくことに期待を示した。

広島・長崎平和関連行事への参加

■広島



式典に参加した三鍋監事（右）と中西活動委員

8月6日、6時15分から広島平和記念公園内にある供養塔前で執り行われた広島戦災供養会主催・広島県宗教連盟奉仕による「原爆死没者慰霊行事」にWCRP日本委員会から三鍋裕監事（日本聖公会主教）、ストッブ！核依存タスクフォースメンバーである中西正史活動委員（寒川神社権禰宜）が参列した。この供養塔には約7万柱が納骨されている。式典は神道、仏教、キリスト教による祈りが捧げられた。挨拶に立った畑口實氏（同供養会会長）は、ウクライナやガザにおける戦闘に核兵器が使用される危険性があることを語り、二度と広島、長崎の悲劇が繰り返されないように願うと語った。その後、WCRPの代表団は、8時から開始された広島市主催「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」への参列と広島県宗教連盟主催の「昼食会」

に参加した。昼食会で、三鍋監事は、広島市の宇品が大陸侵攻の軍事拠点であったことに触れ、原爆と共に多くの命が失われた広島の悲劇を語り、核兵器廃絶と非戦の精神を改めてスピーチの中で力説した。中西委員は、次世代に広島悲劇をしっかりと伝え、核兵器廃絶の願いを受け継ぐことの重要性を、この広島訪問で改めて実感したと挨拶した。

■長崎

8月7日、長崎県宗教者懇話会主催による「懇親交流の集い」に同タスクフォースメンバーの神谷昌道ACRPシニアアドバイザーと水谷周活動委員（日本ムスリム協会理事）が参加した。WCRP日本委員会からは神谷昌道氏が挨拶を述べ、長崎から核兵器廃絶を訴える意義と、継続して取り組むことの重要性を語った。

8月8日午前中、長崎原爆資料館および



追悼空間での祈り

原爆死没者追悼平和祈念館を見学した。その後、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館に移動し、原爆死没者の氏名を登載した名簿が納められている「追悼空間」で祈りを捧げた。夜は原爆落下中心地公園で行われた第52回原爆殉難者慰霊祭に参加した。WCRP日本委員会からは、戸松義晴理事長の「慰霊のことば」を水谷周活動委員が代読した。



代読する水谷活動委員

8月9日、平和公園で行われた長崎市主催の被爆79周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参加した。鈴木史朗市長は「長崎平和宣言」で、「核の傘」の下にいる国の指導者に「核兵器が存在するが故に人類への脅威が一段と高まっている現実を直視し、核兵器廃絶へ大きく舵を切るべき」と訴えた。参列した岸田文雄首相は「核軍縮を巡る情勢が一層厳しさをましている今だからこそ、『長崎を最後の被爆地に』と世界へ強く訴え続けていく」と述べた。

能登半島地震支援について

WCRP日本委員会は、1月18日から支援金勧募を行い、7月末時点で8,036,373円の支援金が寄せられた。現在まで、障がいやアレルギーをもつ方など、特別な配慮を必要とする人びとに対し現地において支援活動を行う、次の4団体に対し支援を行なった。

- ①ゆめ風基金・100万円、②中部臨床宗
- 教師会／傾聴カフェ事業・70万円、③能登
- ルネッサンスプロジェクト／食事マイノリ
- ティー支援・普及事業・50万円、④NPO
- 法人石川バリアフリーセンター／風呂リフ
- トのレンタル事業・30万円

WCRP日本委員会は、8月16日から20日に現地視察を行なった。被災された方々は、未だ一次避難所での生活を余儀なくされている方もおられるが、多くは仮設住宅、みなし仮設住宅あるいは在宅と、生活の場を確保し暮らしを始めた状況と思われる。視察した輪島市の朝市周辺でも6月から解体工事が始まったとのことだが、思うように進んでいない状況がみられた。現地で活動する方々からは、被災者の見守り活動の



片づけの進まない輪島市内

必要性を指摘する声を多く聞いた。また、神社や寺院など伝統ある宗教施設が倒壊や損傷している様子も見られた。

中部臨床宗教師会の傾聴カフェ事業

この度、中部臨床宗教師会から活動報告が寄せられた。中部臨床宗教師会の活動は、1月7日に坂野大徹同会長とスタッフ数名で被災した会員へ物資を届けることからスタートした。3月から同会会員である松本二三秋氏がかねてより開設していた傾聴喫茶「夢小屋23」を支援拠点に、志賀町活性化センターの玄関スペースに傾聴カフェを開設、月2回ほど傾聴活動を行ってきた。6月からは、現在の志賀町仮設住宅とぎ第2団地内の集会所に場所を移動し活動を継続している。

被災地での活動も6ヶ月が経過し、交わ

される会話も少しずつ変化してきているという。当初は、震災直後の様子や地震の恐怖、避難所での生活、今後の不安などであったが、仮設住宅に移ってからは、生活面での不自由、自宅や町全体が被災した中で自分の最期をどのように迎えたらいのか、子どもの教育、避難所や仮設住宅で形成された新たなコミュニティでの暮らし、若かりし頃の思い出などという。また、



傾聴カフェでのようす

寺院が被災し、位牌や軸・墓・仏壇の相談ができず困っているという声を聴くこともあるという。

WCRP日本委員会は、今後も中部臨床宗教師会の傾聴カフェ事業への支援を続けるとともに、担当の災害スタッフフォーメーションバーが11月に現地を視察、慰霊などを行う予定である。

平和研究所 第3回研究会

森 伸生所員

第3回研究会は6月25日、普門メディアセンター（東京・杉並／オンライン併用）で開催され、森伸生所員（拓殖大学イスラーム研究所所長）が『人間性と神の導きによる教えの実践』と題して発表した。

森所員はまず、「イスラームにおける人間性とは、神の教えを全うできる人格を指す。信者は、日常生活において神の存在を意識し、正しい行いを実践することで人格を完成させる」とし、神の存在を知るため、「アッラーは、人間自身の内部に自らの存在を知らしめる手段フィトラ（本性）を備えさせている」と述べた。

神の導きを知るうえで重要な手段として直観があるとし、「すべての信徒の心には、タルギーブ（奨励）とタルヒーブ（警告）を以って信徒に命じ禁止するワーズ（訓戒者・内なる声）が存在する」との、14世紀初頭に活動したイスラーム法学者であるイブン・タイミーヤのことを紹介し、「この『内なる声』が、善行を奨励し、悪行を避けるように導くのであり、クルアーンとスンナの教えに従い日常生活を送る中で、アッラーからの導きとして直観が与えられる」と説明した。

さらに、イスラームにおける人間性は、

「個人の内面的な成長だけでなく、社会的責任を果たすことにも重きを置き、信仰は言葉だけではなく行動を伴うもの。神の導きは、信仰者が正しい道を歩むための指針であり、社会全体の平和と調和を実現するための基盤となるもの」と述べ、神の導きによる教えの実践の重要性を強調した。

最後に、「平和への教えをもつ一人ひとりが、教えを体現し、全うすることで、社会の平和と調和を実現するための務めを果たすことができる」と述べた。

平和研究所 第4回研究会

竹村牧男所長

第4回研究会は7月29日、普門メディアセンター（東京・杉並／オンライン併用）で開催され、竹村牧男所長（東洋大学名誉教授）が『東洋的霊性と平和への一視点——大乘仏教の思想から』と題して発表した。

竹村所長は、まず本発表は東洋的霊性について、大乘仏教の根本理念を探るなかで、内面的なもの発現というよりも、超越的なものによる包摂という特徴に焦点をあてることになったと説明したうえで、ある意味では、超越的な絶対者を立てるキリスト教やイスラームと相似的な人間観・世界観になるわけで、そのことは、宗教間対話を促進する一つの契機になるかもしれないと

指摘した。

続いて、竹村所長は、霊性は人間が有する深い地平の心と目されるものであるが、大乘仏教では人間は仏の心（仏性、仏智）を有していると同時に、それは無明・煩惱に覆われていて、人間が自分でその心を起こすことはできないため、仏様が衆生を愛し衆生の霊性を開発するとされており、「その内なる霊性と外なる仏の智慧のはたらきは、実は一つである」と述べた。つまり、霊性は、「自己の内に自己を超えて有ると同時に、外からも注がれるもの」であり、「単に外なる絶対者のみでなく、この内なる超越をも説くことは、東洋的霊性の一つの特徴」であるとした。

また、平和の実現を考える際、「我々は、自己を超えて、しかも自分を支えている存在へのまなざしを回復すべき」と強調、他者も自己と同じいのちを生きていることに気づいた時に、分断を超えて他者と和解することができると述べた。

さらに、自他一体および自他が関係しあっている自己の実相から、大乘仏教ではたとえば人は四無量心を持つべきだと説き、その「与楽・拔苦・他者の離苦得楽を喜ぶ・相手を差別しない」という四無量心の心を誰もが持てれば、世界に平和が実現すると述べた。

「いのちの森づくりプロジェクト」 「鎮守の社安全祈願祭」

気候危機タスクフォースは7月14日、埼玉県所沢市にある「WC RPいのちの森」で「鎮守の社安全祈願祭」を挙行政した。同タスクフォースメンバーの赤井悠蔵活動委員（カトリック東京大司教区大司教秘書・広報）や「いのちの森」を共同管理する「堀口天満天神社周辺緑地を守る会（代表・中村明氏）」の土地所有者ら約15人が参列した。



玉串を捧げる中村会長

「いのちの森」の頂には、もともと古くから小さな祠（ほこら）があり、風雨などによる破損が激しかったことから、2020年7月14日に祠を新たに鎮座した。1万平方メートルの丘陵地帯で展開している「いのちの森づくりプロジェクト」では、森の保全のための下草刈りや倒木竹の焼却、植樹などを行っている。それら

の活動の安全に向け、祈りが捧げられた。式典は神道の儀式に則り、堀口天満天神社を祭祀する朝日和久師（中氷川神社禰宜）を斎主に厳肅に執り行われた。修祓の儀、斎主一拝、祝詞奏上、四方祓、斎主玉串のあと、参列者一人ひとりが玉串を奉納した。最後に、篠原祥哲WC RP日本委員会事務局長があいさつし、土地所有者への感謝と「いのちの森づくり」の意義を述べた。

共催講座「核時代における非戦」

第1回開催

6月21日、WC RP日本委員会と日本パグウォッシュ会議、明治学院大学国際平和研究所（PRIME）が共催する公開連続講座「核時代における非戦」の2024年度第1回講座がオンラインで開催され、100人が参加・視聴した。

テーマは『原爆投下は国際法に違反する…原爆裁判1963年判決の歴史的意義』。はじめに、共催団体のうちWC RP日本委員会を代表しストップ！核依存タスクフォースの中村憲一郎責任者（佼成学園理事長）が挨拶。中村責任者は核兵器の脅威が現実味を帯びてきていると指摘。ウクライナとロシア、イスラエルとパレスチナの戦争・紛争を例に挙げた。また、国際法は国内法



講師の大久保賢一氏

よりも優れた概念として認識されるべきである」と強調。さらに、国際司法裁判所の役割はますます重要になっていくと述べた。

基調講演は、大久保賢一氏（日本反核法律家協会会長）が務めた。大久保氏は、原爆裁判の背景と意義について講義した。原爆裁判とは、1963年に広島と長崎に投下された原爆の被爆者がアメリカ政府を相手に起こした訴訟である。判決は、原爆投下は国際法に違反する違法行為であり、被爆者はアメリカ政府に対して損害賠償を請求する権利があるとされた。この判決は、核兵器の使用が国際法上禁止されるべきものであることを世界に示した歴史的意義がある。大久保氏はまた、被爆者の苦しみと闘いを紹介し、原爆裁判の判決が被爆者の権利を守るための重要な一歩であることを強調した。

※この講座の動画は、日本パグウォッシュ会議のホームページで視聴できます。

新役員紹介

新たに就任したWCRP日本委員会の役員を紹介する。

理事

上原榮正（日本聖公会首座主教）



上原理事

琉球大学理工学部を卒業し、1986年3月に聖公会神学院を卒業。2013年9月に日本聖公会沖縄教区主教就任。2024年5月より現職。社会福祉法人沖縄福祉会理事長、学校法人聖公会学園理事長、琉球キリスト教奉仕団・愛の村理事、立教学院理事を務める。

大嶋果織（日本キリスト教協議会総幹事）



大嶋理事

日本基督教団龍野教会伝道師、日本キリスト教協議会（NCC）教育部総主事、共愛学園前橋国際大学教員を経て、2024年4月より日本キリスト教協議会（NCC）総幹事に就任。同教育部総主事代行も兼務。

松井ケティ（清泉女子大学教授）



松井理事

清泉女子大学地球市民学科教授。包括的平和学習、協調的コミュニケーション法を専門とする。主な社会活動は武力紛争予防のためのグローバル・パートナーシップ平和教育ワーキンググループ、東北アジア地域平和構築インスティテュート、韓国ユネスコアジア太平洋国際理解教育センターで平和教育プロジェクトを実施している。

和田恵久巳（立正佼成会総務部長）



和田理事

東京外国語大学アラビア語学科を卒業後、カイロ大学に留学。1993年立正佼成会に奉職。98年、英国オックスフォードに赴任し、国際自由宗教連盟国際事務局及び英国立正佼成会拠点員を務める。バーミンガム大学神学部諸宗教関係論で修士号取得。2007年から18年11月までWCRP日本委員会総務部長、18年12月から立正佼成国際諸宗教協力専任部長を務める。21年より現職。WCRP国際女性ネットワーク副委員長も務める。

今月のWCRP新熟語

WCRP事務局が日常の中で感じたことを漢字2文字で表し新しい熟語を作ります。

交楽（こうらく）

8月は家族や友人との楽しい交流の時間が増えて、楽しい夏休みとなりました。

WCRPの活動

《9月》

10日 第49回理事会（京都・龍谷大学大宮キャンパス／オンライン併用）

12日 気候危機タスクフォース学習会（オンライン）

24日 平和研究所第5回所員会議・研究会

30日 青年部会執行役員会（オンライン）

30日 女性部会第2回会合（オンライン）

《10月》

15日 青年部会KCRP青年部会とのミーティング（オンライン）

22日 平和研究所第6回所員会議・研究会

26～27日 和解の教育タスクフォース第2回ファシリテーター養成セミナー

掲載内容の無断転載を禁ず。